

---

2019年

# 5月の普及活動状況

---

## ダイジェスト版

～県下10農林事務所農業普及課と農業経営課(農業革新支援センター)の取組～



岐阜県農政部農業経営課

### 新たなブランドづくり

#### 恵那農林■トマト 夏秋トマト3S栽培の研究会を開催

恵那管内では、県が開発した「3S栽培」による夏秋トマト栽培が普及拡大しており、今年度は管内で13名の生産者が栽培に取り組んでいる。栽培の拡大を受け、今年度から東美濃夏秋トマト生産協議会の中に「3S栽培研究会」が発足し、技術の定着に向けた情報交換や栽培者間の交流が図られている。5月16日には、中山間農業研究所中津川支所で、今年2回目の3S研修会が開催され、本圃における管理について意見交換を行った。

今後も3S生産者が、生育ステージごとに適切な管理ができることを目的に、研究会を月1回程度開催する。

農業普及課では、3S生産者が目標としている単収20tに到達できるよう各生産者の状況に合わせて個別に支援していく。



【トマト3S栽培研究会】

#### 下呂農林■トマト 夏秋トマト3Sシステムの導入が進む

青枯病等の土壌病害の発生を回避でき、従来の栽培方法より2倍以上の収量(20t/10a)が見込める栽培方法「夏秋トマト3Sシステム」(夏秋トマト独立ポット耕)の導入が下呂市においても進んでいる。

今年度は新たに3戸が導入し、大玉トマト4戸(36a)、中玉トマト2戸(5a)となった。

現在、定植が終了し、日頃の管理作業を行う中、厳密な灌水・施肥管理が求められる当該システムにおいては、生産者は給液や排液のEC濃度をはじめ、各種データに基づいた生育管理を行っている。

農業普及課では、当該システムを下呂地域の夏秋トマトの将来を左右する重要な技術と位置づけ、今後も中山間農業研究所と連携した定期的な栽培技術指導の継続とともに、一層の支援を予定している。



【3Sシステムの栽培状況】

#### 東濃農林■アスパラガス 栽培技術研修会を開催

農業普及課では、5月20日に瑞浪市の生産者ほ場で今年度1回目の「アスパラガス研究会」を開催し、生産者と関係機関を含め12名の参加があった。研究会では、農業普及課から、立茎や病害虫防除などアスパラガスの春から夏にかけての栽培管理のポイントを説明し、栽培技術研修を行った。

また、今回の研究会では、ほ場での生育状況及び栽培管理状況を確認しながら、今後の管理方法について参加者間で積極的な意見交換や検討が行われた。

農業普及課では、引き続き夏期の安定生産に向けた高温対策実証ほを設置し、東濃地域の環境に適した栽培技術の確立に取り組むとともに、生産拡大に向け支援を行っていく。



【研究会の様子】

## 多様な担い手づくり

### 岐阜農林 ■スマート農業 無人トラクターいよいよ始動！

県では、本年度から2年間、国のスマート農業技術の開発・実証プロジェクトを活用して、(農)単南営農組合、JA、農機メーカー等とコンソーシアムを設立し、超低コスト輸出用米の生産実証に取り組む。農業普及課は、プロジェクトの進行管理や実証試験のデータ分析等の役割を担っている。

5月31日には、農研機構中央農業研究センター プロジェクトオフィサーを招いて、新たに導入されたほ場管理システムの入力状況や今後の作業計画等を確認する予定である。

また、間もなく作業が始まる無人トラクターについては、どのほ場でどのように動かすのかなど細かな検討が必要であり、農業普及課では、(農)単南営農組合や農機メーカーらと検討を重ねるとともに、実証内容が検証できるようデータ収集を進めていく。



【導入した無人トラクター】

### 揖斐農林 ■柿・夏秋なす 帰農塾 開講！

JAいび川は、5月11日(土)に「第1回柿帰農塾」を、5月18日(土)に「夏秋なす帰農塾」を開講した。

帰農塾は、新規栽培者や定年帰農者、後継者の確保と生産技術向上を図るため開催している。「柿帰農塾」は、35名、「なす帰農塾」は13名の参加申し込みがあり、それぞれ視察研修を含め年5回の開催を計画している。

農業普及課からは、柿及びなすの生理生態や栽培管理等の講義を行った。柿では、かき振興会技術部員を講師に「摘蕾方法について」と、新たな試みとして品種更新や園地の若返りに必要な技術として「接ぎ木について」も実習に取り入れた。なすでは、なす部会長を講師に定植作業を実習し、各自1~2株の定植を行った。

受講者には、定年帰農をする前に基礎を学びたいという若手や女性も多く参加されており、熱心に質問していた。

農業普及課では、今後も帰農塾へ協力し、定年帰農者や新規栽培者、後継者の確保への支援を行っていく。



【柿帰農塾の様子】

### 中濃農林 ■指導農業士 地域農業のリーダー的役割への期待(新規認定者)

岐阜県指導農業士は、新規就農者等に対するアドバイザーとして、また地域の農業振興のためリーダー的な役割を担うことを期待されている。今年度は8名の新規指導農業士のうち、管内からは高井博史氏が5月21日に行われた認定証交付式にて新たに認定された。

高井氏は、関市内において、施設園芸、露地野菜の他に加工、直売、消費者交流施設を運営するなど、幅広い農業経営に取り組んでいる。今後は果樹などの品目も取り入れ、体験型観光農園に力を入れていくなど、さらに経営の多角化を図る予定である。地域農業のリーダーとして、若手の担い手育成についても期待をされており、農業普及課は、今後も指導農業士の活動支援を行っていく。



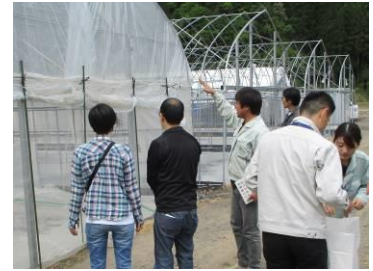
【認定証交付式の様子】

## 郡上農林■新規就農 郡上市の新たな担い手確保を目指して

中濃地域就農支援協議会(構成：JAめぐみの、郡上市、郡上農林事務所等)では、県内外から各種品目の新たな担い手確保に取り組んでおり、5月13日にぎふアグリチャレンジ支援センターの協力により、トマトの就農希望者への視察対応を行った。

当日はJAが運営する「郡上トマトの学校」の取り組みを中心に視察してもらい、郡上市から新規就農するまでの各種支援について説明を行った。農業普及課からは地域での栽培上の特徴等について助言を行った。また、参加者の希望により、実際に新規就農した農業者を訪問し、生活面も含めた郡上市での夏秋トマト経営について話を聞き、参加者は熱心に質問し、活発な視察となった。

今後も農業普及課は、中濃地域就農支援協議会等関係機関と連携を図り、郡上市での担い手の確保、新規就農者の支援を続けてゆく。



【トマトの学校視察の様子】

## 可茂農林■美濃白川就農応援会議 研修開始式を開催

5月9日、東白川村鮎ヶ瀬会館にて美濃白川就農応援会議研修開始式が開催され、構成員および事務局、あすなる農業塾長、研修生、来賓等28名が出席した。

今年度の3名の研修生に研修認定証が授与され、来賓の東白川村長等より激励の言葉が述べられた。

研修生は研修の抱負を語り、研修生を1年間指導するあすなる農業塾長からは「とても熱意ある研修生であり今後もしっかり頑張ってもらいたい」と励ましの言葉がかけられ、地域が一体となって就農を支援していくことが確認された。

農業普及課は、今後も新規就農者の育成に関係機関と連携して積極的に取り組んでいく。



【研修開始式】

## 革新支援センター■普及指導員・JA営農指導員 基礎技術習得研修I—3(病害虫)を実施

5月23日、24日に基礎技術習得研修I—3(病害虫)を開催した。本研修は、普及経験2年目の農業普及指導員を対象として実施しているが、JA営農指導員の病害虫に関する基礎技術習得のため、JA営農指導員も対象として実施している。

研修内容は、病害虫及び農薬の基礎、IPM(総合的病害虫・雑草管理)、発生予察情報の活用についての座学、病害虫の同定、診断依頼の方法及びサンプルの取り扱いについての実物を用いた実習で、受講者全員が積極的に取り組んだ。

病害虫の同定には、実際に病害虫を同定する経験を十分積むことが必要であるため、受講者が自分の業務の中で意識して取り組まれることを期待している。今後も機会をとらえて、病害虫の持ち込み相談の時などにフォローをしていきたい。また、実習については実習用病害虫のサンプル確保が課題であり、関係者で協力しながらより良い研修にしていきたいと考えている。



【顕微鏡観察の指導】

## 売れるブランドづくり

### 西濃農林■ナス 海津ナス部会 県GAP取得に向けた取り組み

海津ナス部会では、本年度より県GAP取得に向けて取り組んでおり、4月26日に、事務局、JA出荷担当者およびJ-GAP指導員資格保持者、部会員らとともに、倉庫管理項目について巡回指導を行った。

部会にとって初めての試みであり、事前には場図の作成を促したり、モチベーションが下がらないよう、取り組みやすい項目から指導するような工夫をした。部会員同士が倉庫を実際に見比べることにより、整理整頓が行われている部員の事例を参考にできて大変勉強になったとの声も聞かれた。今後も部会活動として取り組みを進めていく。



【農産庫置き場の指導】

### 飛騨農林■ほうれんそう 軟弱野菜調製機の情報収集

ほうれんそう生産においては、下葉とりなどの調製作業をする作業者の不足が産地の課題となっている。

飛騨蔬菜出荷組合ほうれんそう部会は、飛騨市・JAひだと連携し、雇用不足やほうれんそう調整作業の効率化の検討を始めている。

今回、少ない人数で効率的に調製作業をする方法を検討するために、新型軟弱野菜調製機を導入した調製作業場を視察した。視察先では、旧モデルを含めて軟弱野菜調製3台と包装機2台導入し、9名でスピーディーに調製が進んでいる様子がうかがえた。

農業普及課では、関係機関と連携して新しい機械の導入なども視野に入れつつ、効率的に調製作業を行う方法の検討を続ける。



【調製作業場の視察】